

岐阜大学のとりくみ

2010.4 ▶ 2010.9

4月

人間医工学研究開発センターを設置

4月1日、高齢化社会に向けて必要となる先端医療、福祉支援技術の開発に対応するための「人間医工学研究開発センター」を開設しました。このセンターは本学で6番目となるプロジェクト研究センターであり、医工連携頭脳集団として活動し、大学を核とした産官学共同研究を推進していきます。

「イメージ&機能解析部門」「五感コミュニケーション部門」「人間支援ロボティクス部門」の3部門連携体制により、医学教育から医療・福祉に関するあらゆる先端技術開発について活動し、地域産業振興および世界的高齢化社会に貢献します。

4月

平成22年度入学式を挙行

4月7日、長良川国際会議場において平成22年度入学式を行い、学部学生1,397人および大学院学生640人が入学しました。

学部入学生への告辞で森学長は、「在学中に将来に対する目標を定める努力をしてほしい。そして、日本がどのような国になればよいか、そのためにどのような努力をしなければいけないかという議論に積極的にかかわってほしい。また、留学生との交流を通じて多文化共生の意義についての理解を深めてほしい。それが皆さんの成長につながる」と新入生を激励しました。入学生を代表して、工学部の杉森克成さんが「学業や研究に専念し、これからの社会を担う力を育むため日々努力します」と宣誓しました。

大学院入学式では、来賓としてお招きした細江茂光岐阜市長から祝辞をいただきました。

4月9日には大学院連合農学研究科・同連合獣医学研究科の入学式があり、43人の大学院学生が入学しました。

なお、森学長の告辞は大学ホームページでご覧いただけます。



4月

応用生物科学部が岐阜市教育委員会との連携覚書を締結

本学応用生物科学部は4月9日、岐阜市教育委員会との間で連携協力に関する覚書を締結しました。

当日は、安藤征治岐阜市教育委員会教育長、安田和夫岐阜特別支援学校長が来学し、金丸義敬応用生物科学部長と締結式を行いました。この協定は、障がいのある生徒の社会参加および共生社会・協働社

会の実現に関して相互の機能を活用し実践的な連携協力を行い、本学および岐阜市の教育・福祉の充実・発展に寄与することを目的としています。覚書締結後、安藤教育長は「生徒たちの可能性が広がり、自信につながる」と述べ、安田校長も「生徒たちにとって社会に出ていくための素晴らしいステップができ、とてもうれしい」と話しました。

本学部附属岐阜フィールド科学教育研究センターでは、これまでも知的障がい者の就労についての取り組みを行っており、アルバイトの雇用やインターンシップ生の受け入れを実施しています。今後は岐阜特別支援学校の生徒を一年を通じて受け入れ、大学内の農場で農業実習を行うことになっています。



4月

附属動物病院の新棟が完成

本学応用生物科学部附属動物病院の新棟が完成し、4月12日、披露式典を開催、関係者に公開しました。式典では、森学長が「動物医療・地域産業の貢献に努めていきたい」と挨拶し、金丸学部長が「設備を生かし、充実した臨床教育と高度医療に貢献したい」と述べました。

本病院は中部地方唯一の大学附属動物病院であり、地域の中核的な高度先進病院としての機能を担っています。完成した新棟には国立大学では初めてとなる高エネルギー(リニアック)型放射線治療器を導入し、今後一層、がん治療の先駆的役割を果たしていきたいと考えています。

4月

国際交流会館C棟(ゲストハウス)が完成

国際化を推進する本学が建設を進めていた国際交流会館C棟(ゲストハウス)が完成し、4月26日、開館記念式典ならびに見学会が行われました。

国際交流会館C棟は单身室・夫婦室・家族室の計17室からなる2階建て建築で、安全面を考慮して全室オール電化の設備を採用しています。今後は主に、学術交流協定大学など外国の教育・研究機関から来学される外国人研究者向けの居住施設として利用されます。

また、国際交流会館C棟の建設に合わせ、隣接する交流施設である柳戸会館の改修も行われ、C棟と一体型の建物としてリニューアルし、同日見学会を行いました。柳戸会館は本学の同窓会および教職員の寄付によって昭和61年に建設されたもので、式典の中で後藤悦男岐阜大学同窓会連合会会長は「大学の発展のため、国際交流のために有効活用してほしい」と述べました。



4月

医学教育開発研究センターが 全国の医学教育共同利用拠点に認定

本学医学部に設置されている「医学教育開発研究センター」が文部科学省から医学教育共同利用拠点に認定されました。今回認定された教育関係共同利用拠点は全国8カ所で、医学教育分野では唯一の認定になります。

医学教育は全国の80医学部・医科大学で行われています。医療の進歩に伴い、医学教育の内容と方法も常に改善していく必要があり、それを推進するためにさまざまな機関・組織が活動している中で、本学の「医学教育開発研究センター」も2001年に医学教育分野初の全国共同利用施設として設立されて以来、医学教育の改善のために活動してきました。こうした実績が認められ、今回の認定に至っています。

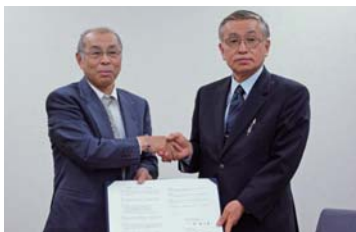
医学分野に限らずさまざまな学問や専門職の発展のためには教育が非常に重要です。「何を教えるか」だけでなく「どのように教えるか」「どのように学ぶか」を考え、それを実践できる医学教育指導者の育成をめざし、全国の教育機関と連携して医療の発展と向上に貢献していきたいと考えています。

5月

岐阜県環境管理技術センターと 連携協定を締結

5月14日、本学が実施する「流域水環境リーダー育成プログラム」に関する協定を財団法人岐阜県環境管理技術センターと締結しました。この協定は、アジア諸国の水質・水資源などの流域水環境問題の解決に向けた人材（水環境リーダー）を育成することを目的としています。協定により、プログラムを履修する留学生の奨学金支援のほか、浄化槽関連の専門家による講義、インターンシップなどを行っていきます。

協定締結後、森学長は「留学生支援に力を貸していただき大変うれしく思う。また、岐阜県の『全国豊かな海づくり大会』と時期を同じくして締結でき、本学も水環境問題について真摯に取り組んでいく」と挨拶し、熊崎守男理事長は「プログラムを修了し母国で活躍する留学生とも交流していきたい」と述べました。



6月

緊急・岐阜シンポジウム 「口蹄疫を理解する」を開催

6月20日、岐阜市内の会場で「口蹄疫を理解する」と題してシンポジウムを開催し、市民の方や関係者など150人の参加がありました。このシンポジウムは、「口蹄疫とはどんな病気なのか」「宮崎県では何が起きているのか」など市民の皆様は口蹄疫を正しく理解していただく目的で開催しました。

開会の挨拶で森学長は「できるだけ早い時期に市民の皆様は正しい

情報をお知らせしたいと思っていた」と述べました。応用生物科学部の杉山誠教授は口蹄疫の特徴を説明し、「流行は自然災害として位置づけ、感染症対策の危機管理体制を整備しなければならない」と提言しました。同学部の福士秀人教授は、宮崎での流行について発生農場数の推移グラフを示しながら解説しました。世界的な流行と防疫について講演した帝京科学大学の村上洋介教授からは、口蹄疫対策の難しさと国レベルでの感染症対策が必要との指摘がありました。岐阜県岐阜家畜保健衛生所保健衛生課の山崎稔課長からは、家畜衛生情報を発信し衛生管理の徹底に努めていることなど岐阜県の対応について話がありました。

会場からは殺処分や消毒の方法など具体的な質問があり、関心の高さを改めて認識させられる内容の濃いシンポジウムとなりました。



8月

オープンキャンパス2010を開催

8月9日～11日に「オープンキャンパス2010」を開催しました。期間中は不安定な天気にもかかわらず、3日間で昨年(4,712人)を上回る5,027人の方々に参加していただきました。

各学部では、学科(課程)の紹介や模擬講義・体験実習・施設見学などを実施し、学部の特徴を紹介しました。また今年度も、学生有志が丸池付近に総合案内所を設置して参加者の問い合わせに応えました。その他に、在学生によるキャンパスツアーやトークンコーナーなどを行い、岐阜大学の魅力を伝えました。



9月

連合農学研究科創設20周年記念会を開催

9月10日、岐阜大学大学院連合農学研究科創設20周年記念会を岐阜市内で開催しました。

本研究科は、岐阜大学・信州大学および静岡大学の各大学の農学研究科が連合して平成3年4月に設置され、当初から今日まで、農学の進歩と生物資源関連産業の発展および貢献できる人材養成に力を注いでいます。

記念会当日は、元岐阜大学長であり、設置当時、本学大学院農学研究科長を務められた金城俊夫先生による「連合農学研究科の創設期を振り返って」と題した記念講演を行いました。続いて祝賀会では、高見澤一裕研究科長が「20周年を迎えるにあたり、関係者の方々のご支援に感謝したい。10年後、また皆さんと30周年を祝うことができるよう研究科を盛り上げていきたい」と挨拶。約80名の出席者は研究科のさらなる発展を誓いました。

